

「センター英語」から「英語」へ

竹岡 広信

1. センター国語で高得点の生徒

今年、教えている高校1年生にセンター試験の問題をやらせてみた。その中に真面目ではあるが、英語はそれほど得意ではない女子生徒がいた。それでもセンター英語では何とか130点ぐらい。本人も満足な様子だった。ところが、驚いたことにセンター国語は180点を超えていた。今年の国語は難関で、3年生でも140点あれば御の字というものだっただけにびっくりであった。彼女は、普段、「現代文の勉強」はしていない。また、古文単語を詰め込んだり、漢文の句法を丸暗記したこともない。ただし、本は好きで、ひと月に何冊も読むと言っていた。

高校で教えていた3年生の読書好きの女子生徒は、(僕の指導が至らないこともあって)今年の英語では160点ぐらいなのに、国語ではなんと200点であった。まわりの人間も驚いていたが、何よりも本人が驚いていた。受験があるので最近ではあまり読んでいないと言っていたが、本は手放さない。

一方、日本語の本をほとんど読んでいない高校1年生の1人は、センター英語では160点を超えていた。彼は英語はこの1年間随分頑張ってきたので、8割を超えたことは嬉しかったようだ。しかし、国語は60点そこそこしかなかった。本人は随分ショックだったようで、「どのような問題集をやればいいですか?」と尋ねてきたので、「そのような質問をしているから得点できないんだよ」と冷たく言っておいた。

高校3年生の男子生徒は、英語は190点を超えた。ところが、国語は110点にも満たなかった。努力家であり、予備校の「センター国語」の講習会にも足繁く通っていた。しかし、その効果が出たとは言えない結果になった。

2. 偽物の「勉強法」

予備校生で「英語は努力しているのに伸びない」と言っている生徒が多い。こういう生徒はだいたい

同じようなことをしている。予習は英文を全てノートに写し、全訳を書く。そして1000問ぐらい入った文法問題集を「5周」ぐらいする。また、暇があれば丸暗記型の単語集とにらめっこしている。ところが、英文の多読なんて絶対していない!だから「努力している」というのは、本人の錯覚で、実は「何もしていない」に等しい。

考えてもみてもらいたい。教科書なんて所詮200ページぐらいのものだ。普通の本として読めば何ページぐらいになるのだろうか?教科書から、余白やら、練習問題やらを除き、活字のポイントを下げれば、恐らくその半分にも満たないように思われる。もし、たったそれぐらいの量を「精読」したぐらいで英語の力が伸びるとするならば、奇跡といってもよからう。これは予備校のテキストにも言えることだろう。

誤解されると困るので強調しておきたいのは、「教科書が悪い」とか「精読が悪い」と言っているのではない。「精読」というのは「多読」と平行してやることで効果が何倍にもなると言いたい。近頃では「精読は悪だ」という人もいるが、緻密な読みの訓練と、多読、多聴をバランスよくやることで、力は伸びるはずだ。

国語の出来る子で、読書経験の少ない子はいるだろうか?と考えてみれば簡単だ。答えは「絶対にいない」ということ。国文法の問題集を5周し、漢字暗記に明け暮れてはいるが、肝心の本を読まない子の国語力はどうなるか?

「センター国語」の勉強と称して、B4用紙2枚分ぐらいしかない「国語の問題」を、「しかし」「だから」などを頼りに「解く技術」を磨いただけでは、本当の国語力にはならないはずだ。もし、読書経験も乏しく、普段新聞も読まないような生徒が、そのような問題集を5周しただけでセンター本番の国語で高得点になるというなら、そのような「センター国語」は偽物であり、生徒の「国語力」を正確に計

るものとは言えないだろう。

同じことが英語についても言える。1ページぐらいの英文を1時間もかけて授業するだけでは、その授業がどれほど創意工夫に富んだものであっても、生徒の英語力の向上に効果がそれほど上がるとは思えない。生徒の学力にあった多読用の本を精選して、1年間にせめて1000ページぐらいの多読をさせなければならぬ。

3. 英語・国語は「体育」

英語や国語は、体育と同じで、黒板で説明するよりも、生徒が実践する時間を数多く作った方がいい。それこそが伸ばす秘訣だろう。

「体育の先生は偉い！」と思うことがある。授業の始まりに「今日はサッカーをやる。みんな怪我をするなよ」と言う。ただそれだけで生徒達は生き生きと動き出す。先生は、授業中に下手くそな生徒を見つけても、怒ったりはしない。「こうしたらもっと遠くにボールが飛ぶよ」などのアドバイスをしても最小限。もちろん、サッカーのルールを毎週試験することもない。授業の終わりには「みんな怪我はないか？」で終わる。だから体育の授業で寝る生徒はいないし、楽しみにしている生徒も多い。

授業を受けただけでサッカーが上手にならないことなどだれでも知っている。そして上手になりたいと思う生徒は、授業外の時間に勝手にドリブルの練習などをこなしている。もちろんサッカーのルール集を見ている時間など僅かで、常にボールをもって練習している。

英語や国語もこれと同じことが言える。生徒主体で数多くの経験を積ませるように指導すればいいのである。そして、重箱の隅のような文法事項や、単語の丸暗記といったことで「英語を嫌いにさせる」のだけは何としても避けなければならない。

4. 「センター英語」から「英語」へ

予備校で夏と冬の講習会で「センター英語」を担当し始めて、20年以上になるが、年々「講習会の目玉」が減っていると実感する。

現在のセンター英語は、とにかく、第2問までの問題は「(たとえ良問であっても) 難問」「頻度の低い些末な問題」は排除して(追試験は除く)、「普通の力」があれば解ける問題にしてある。そして年々

読解への比重を高めているようだ。

昔は、「ワナ評論文(正解の選択肢が、本文を相当言い換えた評論文)」があり、正解率も30%を割り込むことが多かった。それ故、当時はその問題を苦手とする生徒が数多くいて、その問題解説は講習会の「目玉的存在」だった。ところが、ある年から突然その問題が姿を消した。授業の「目玉」が減った僕は随分と落胆したことを覚えている(なお、今でもこの「言い換え」はセンターの選択肢の特徴であるが、あれほど露骨なものではない)。「文強勢問題」も苦手としていた生徒が多く、これまた講習会の「目玉的存在」だったが、やはり姿を消した。

「文整序問題」も、「漠然から具体」や「代名詞」や「butやhoweverに注目する」ことによって、英文内容をほとんど読まずとも解ける時代があった。出来ない生徒には救いの「テクニク」だったに違いない。その問題も姿を消した。

「文法問題」は、1990年代には、if notとunlessの違いとか、persuadeは「説得する」ではなく「説得に成功する」であることを尋ねた問題など、従来の日本の英語教育の「常識」を問題視するような「良問」が散見された。当然ながら、これらの問題は、成績上位者も間違えることが多く、中には正解率が20%を割り込む問題さえ見られた。よって皮肉なことに、こうした文法・語法問題も講習会の「目玉」であった。ここ数年、それらの問題は陰を潜め、「どこかで見た問題」へと変容してきた。「日本の英語教育にメスを入れる」問題がなくなってしまうのは寂しいことであるが、成績上位者の正解率が20%を切る問題というのは異常な事態である。現在のタイプの問題は総合点の上位層は失点することは少ないが、総合点の下位層では正解率が低くなることもある。言い換えれば、「実力の差」を見るためには良問と言える。もちろん、「どこかで見た問題」と言えどもlieとlayの違い、as ifの後ろの時制などの「危ない語法や文法」は排除され、本当に頻度の高い確実に答えが出る問題だけに絞られていることは十分に評価できる。

こうして、講習会の「センター英語」は年々、「目玉」がなくなり、「普通に読んで普通に解く」ことへ、つまりは「普通の英語」へと変貌してきたように思う。センター英語が進化している以上、教える側も進化しなければならないと思う。

5. 水のように「さらさら」とした授業へ

このような「センター英語」に対応するのに、怪しげな「テクニク」は不要だ。そればかりか、有害にさえなる。

センター試験には「小賢しい手」は通用しないことは、ここ 20 数年で嫌というほど思い知らされた。だから、怪しい発言は非常に気になる。

「ディスコースマーカーに注目して」なんて言葉は避けたい。moreover や but に注目するだけで英文が読めるなら苦労しないからだ。また、そうした「ディスコースマーカー」に注目する癖は、多読を通して自然と培われるものである。

同じ理由で、「トピックセンテンス」とか「キーワード」というのも悩ましい。英文全体を見据えた上で、読んだ時に「ここが大切だな」と感じるに過ぎないのではないだろうか。

「例は飛ばして読む」というのも本末転倒である。「例」というのは、筆者が自らの主張をより理解しやすいものにするために書いている部分であって、主張の部分がわからない者が、例を飛ばすのはわざと理解を困難にするにすぎない。

要するに「ここに注目すれば読める」というのは怪しい。普段何かを読んでいる時に、たとえば新聞や評論などで「キーワード」を意識して読んでいる人はいないのではないだろうか？ 読んでいる時は内容以外に集中する対象はないはずである。

「アクセントは外来語に注意！」などと言われても、どのように注意したらよいのか？ ちなみに過去 25 年間にアクセントの試験で出題された外来語を分析してみた。語頭にアクセントがあったのが本試 33 回で、追試験 34 回。以下がリストである。

balance*['87] ['91] ['10 追], manager['87] ['01 追] ['12 追], average['87 追], platform['87], interval ['87 追] ['12 追], program['90], restaurant['90], orchestra['90 追], pattern['90] ['12 追], exercise* ['91], interview* ['91] ['07], lemon['91 追], portrait* ['91 追], standard['91 追] ['94], energy['91 追] ['96] ['09 追] ['13], episode['91 追], essence['92], talent ['92], jacket['92 追], supermarket['92 追], image ['93], message['93], volume['93] ['12 追], pyramid ['94], ceremony['94], festival['94 追], penalty['94 追], crystal['95], heroine['95], rescue* ['95 追], artist['96], boycott* ['96], damage* ['97] ['10],

newspaper['97 追], sandwich['99], agent['99 追], network['99 追] ['04], tunnel['99 追] ['02 追], novel ['00], drama['01], balcony['00], vitamin['01], project* ['02 追], present['02 追], comment* ['04], greenhouse['04 追], suitcase['05 追], challenge* ['06 追] ['13 追], pineapple['07 追], fantasy['07 追], hamburger['07 追] ['13], telephone* ['07 追], calendar['09], avenue['11 追], athlete['12]

一方、語頭以外にアクセントのあるものは本試 13 回：追試験 10 回である。以下がそのリスト。
police['87 追], event['90], parade['91], policeman ['90], machine['93], economy['93], suspense['94], astronomy['94 追], relief['95], canary['95], canoe ['95 追], canal['96], mistake* ['97], percent['97 追] ['00 追] ['00 追] ['13], unique['97 追], adventure['98], advice['00], cassette['10 追], executive['11 追], technique['12 追]。

以上から「名詞は主に語頭にアクセントがある」という大原則は言えるが、その原則に当てはまらないものも存在する。よって責任をもった発言をするためには「1 語 1 語しっかり暗記すること」となる。「外来語に注意」では不親切である。

「語句整序はつながるところ」から、「動詞に注目！」とかはどうだろう。言語活動である以上、まず「何が言いたいのか？」に注目するのが先決ではないだろうか。「内容も考えずにパズルのように解く」というのは明らかにセンター作成部会の意図、つまりは言語活動に反していると考えられる。とにかく「まずは内容を考える！」というのは最も親切な助言だろう。

「長文問題はパラグラフ毎に解く」はどうだろうか？ 全体像もわからないうちに、設問を解くというのは、無謀だろう。リスニングで「パラグラフ毎に解く」というのは当然不可能だが、筆記であっても無理がある。邪魔くさくてもパラグラフ毎にメモをして、最後まで読み切り全体像を捉えてから解くというのが確実な方法に思える。今年のセンター試験の最後の全体像を捉える問題の正解率は、総合得点が 180 点の集団で 65% の出来、総合得点が 150 点の集団ではなんと 27% しかない。ある生徒が言った。「先生、全体を捉えてからやると時間が足りなくなってしまうんです」。これに対する適切な答えは、「それは現在、君には読解の力がないからだよ。読

解の力をつけるために、毎回パラグラフ毎にメモをして全体像をつかむようにしてみなさい。それと語彙を意識して増やすように努力しなさい。」冷たいように聞こえるかもしれないが、これが親切な解答だと思っている。

淀みのない正攻法の指導こそが、遠回りに思えても、結局は高得点に結びつく早道。ごちゃごちゃとしたテクニックをつめこむのではなく、さらさらとした指導こそが、教える側だけでなく教わる側も無理のないものであろう。

6. 「センター英語」に必要な語彙

今年の「センター英語」に登場した単語を抜粋してみる。athletic「筋骨たくましい」、ally「協力者、同盟国」、controversy「論争」、slavery「奴隷制度」、distribution「分布」、embarrass「～を当惑させる」、sustainable「持続可能な」、ruin「～をダメにする」、transform「～を変容させる」、let go of「(ロープなどを)放す」、injustice「不正」、exclude「～を除外する」、consequence「結果」。とても簡単とは言えない語彙だ。一昔前のセンター試験とは随分とレベルが違う。英検で言えば2級以上準1級未満の語彙が必要と言ったところだろうか。これは、難関の国立大学が要求するレベルと大差ない。つまり、語彙だけ見ても「センター英語」は存在しないことがわかる。「センター試験用の単語集」とか「センター英語頻出単語」なんていうものは存在しないと言えるだろう。

このような語彙のレベルをクリアに太刀打ちするには、「センター英語」での高得点を取るために不可欠な要素とは語彙の増強だと言えよう。

7. 「知る」より「楽しい」

語彙をつけさせることが必要だからと言って、「単語集を丸暗記させる」ということにはならない。「丸暗記」は「英語嫌い」を助長することが多く、逆効果を生む危険性が高い。

全国の多くの高校で、単語集が配られ単語試験が実施されているにも関わらず、センター英語の平均が6割ぐらいいかない。これは単語集が機能していないことを意味する。「生徒が努力していないから覚えられない」というのも原因として挙げられるかもしれないが、指導する側の工夫も必要だろう。語源

も何も載っていないような丸暗記の単語集を渡して「覚えて来い」というのも無責任ではないだろうか。

「長文中で覚える」、「コーケーションで覚える」、「反復して覚える」、と言われても、所詮丸暗記の域を出ない。もし、大半の生徒が英語が大好きで、ひたむきな努力を厭わないという場合には、丸暗記を苦痛に感じないこともあろう。しかし、もしそのような生徒が多いとするならば、センター英語の平均点があれば低いことにはならないだろう。controversyは、contro-「逆」+ -versy「回転」から、大きな渦がグルグル回っているというイメージだけでも暗記の手がかりになろう。universe, reverse, diverseなども一緒に提示すれば、定着率は上がるだろう。

同時に、そのような単語を「どのように使うのか」を提示しなければならない。complicatedは口語で「(マイナスイメージの)複雑な」、complexは文語で「(プラス・マイナスどちらも使える)複雑な」といった具合である。こうしたものをイコールで結ぶのは「英語嫌い」を増やすだけだろう。日本語を学習する外国人が、たとえば「目的」と「目標」をイコールで結んだのでは、使えない単語になってしまうだろう(「中間試験の目的は」と「中間試験の目標は」では使われる場面が違うはずだ)。

そして、こうした単語の使い方がよくわかるような、良質の英文を数多く提供することで単語定着の効果は倍増するはずだ。良質な英文とは、教科書はもちろんのこと、センター試験の過去問題や英検の英文もよい。語彙定着を目的として、このような英文を使う場合には、必ずしも授業は必要なく、全訳と簡単な解説プリントを作って配るだけでも効果はある。

論語の中に、「知之者不如好之者、好之者不如樂之者」とある。「知識をもっている者より、好きな者が勝り、好きな者より楽しむ者が勝る」という意味らしい。まさに、勉強のあるべき姿を示しているような気がする。

(駿台予備学校講師・洛南高等学校講師・竹岡塾主宰)

※『Write To The Point』、『Clues To Reading』、『Grammar Gym』(以上数研出版)など著書多数。